

# 日展ニュース

No. 176

<http://www.nitten.or.jp/>

令和2年9月28日発行

編集兼発行人 土屋 禮一

## 改組 新 第7回日展に向かって



驟雨来る高原 川崎春彦

## 「改組 新第七回日展を開催するにあたつて」

日展理事長 奥田小由女



改組新第七回日展は、本来ならば華やかに、オリンピック・パラリンピックの開かれる年の秋に開催予定でありました

が、突然の思いもかけない新型コロナウイルスの世界的感染拡大により、オリンピックは延期となり、多くの美術公募展の延期や中止が次々に発表されるなか、日展はどういうにするのか注目されるところとなりました。

コロナの終息がなかなか難しい状況下で、我々日展作家は社会に対してもうかるべきか、今こそ日展はコロナで疲弊した社会に対し「美」を届け、人々の心に寄り添える美術・芸術の力を発信すべき

などの思いから、日展五科が力を合わせ助け合つて、休まず展覧会を開催する運びとなりました。

密を避けるため、残念ながら、恒例の開会式、オープニングパーティ、各科の懇親会、「日展の日」、講演会等々を中止と致し、感染症対策に努め、生命を守り抜く懸命の努力を致します。

第七回日展が作品本位の五科揃った美術公募展として歴史に残る素晴らしい展覧会となる事を信じ祈念致します。

皆様の御理解と御協力を心より、お願ひ申し上げます。

# 改組新 第七回日本美術展覧会実施内容

改組新 第七回日展 会期中のイベントのお知らせ

## 《作家の声を聴くプログラム》

日展公式サイトでご覧になります。日展会場でも放映。詳しくは日展公式サイトで。

★今年の日展の見どころ

ゲストと今年の日展会場を巡ります。(ゲストは公式サイトで発表)

★「作品の解説」各部門(日本画・洋画・彫刻・工芸美術・書)

受賞作品を中心に解説します。

## ★「作家インタビュー・ダイジェスト」

アトリエ等で日展作家にインタビューした様子をダイジェストで放映します。

会場 国立新美術館 東京都港区六本木七一三一二

小・中学生は無料。

※団体券は20名以上。20枚購入につき招待券1枚進呈。  
○新型コロナウイルス感染症対策のため、入場制限を行う場合がございますので、あらかじめご了承ください。

会期 令和2年10月30日(金)～令和2年11月22日(日)

観覧時間 午前10時～午後6時(入場は午後5時30分まで)

休館日 11月4日(水)・10日(火)・17日(火)

入場料 ○当日券 一般 一、三〇〇円

(税込) 一、三〇〇円

○団体券・前売券

高校・大学生 一般 一、八〇〇円

小・中学生 一般 一、一〇〇円

高校・大学生 六〇〇円

小・中学生 六〇〇円

会期 令和2年10月30日(金)～令和2年11月22日(日)

観覧時間 午前10時～午後6時(入場は午後5時30分まで)

休館日 11月4日(水)・10日(火)・17日(火)

入場料 ○当日券 一般 一、三〇〇円

(税込) 一、三〇〇円

○団体券・前売券

高校・大学生 一般 一、八〇〇円

小・中学生 一般 一、一〇〇円

高校・大学生 一般 一、八〇〇円



改組新 第7回日展行事日程(予定)

||係会関係||

- 10月18日(日)午後3時  
○入選者・特選受賞者発表  
(洋画・工芸美術)  
(書)
- 10月19日(月)午後3時  
○入選者・特選受賞者発表  
(日本画・彫刻)
- 10月22日(木)午後3時  
○入選者・特選受賞者発表  
(日本画・彫刻)
- 10月29日(木)  
○出陳者内覧  
実施内容検討中
- 10月30日(金)  
○改組新第7回日展開会  
○大臣賞等受賞者発表(予定)
- 11月12日(木)  
○改組新第7回日展授賞式  
(国立新美術館講堂)
- 11月22日(日)  
○改組新第7回日展閉会
- ※出陳者懇親会・開会式は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、本年度開催なし

改組新 第7回日展前売券販売店のご案内

(10月1日より販売)

プレイガイド

チケットぴあ・CNプレイガイド

ド・ローソンチケット・ファミリーマート店内「tami」ポート、他

デパート(友の会)  
高島屋(大宮店)・東武・丸広、他

カルチャーセンター

読売・日本テレビ文化センター、ヨークカルチャーセンター、他  
他に画材店・画廊・書道用品店などでも取り扱っています。

日展公式サイトでも販売しております。

A rt」が開催されました。連日の猛暑の中、限られた時間でしたが、集中して仕上げた作品はいずれも力作ばかり。

今回は、大人と子供、あわせて

57名の参加者。作品展は公式サイトで行い、共同制作は、パブリックスペースや国立新美術館の日展会場で展示を予定しています。

☆今回制作した作品は、日展のホームページ(こども日展ページ)でご紹介します。

トワイライトチケット



8月1日 工芸美術(陶)  
時間限定の入場券

観覧時間 午後4時~6時

一般一枚 四〇〇円  
高・大学生一枚 三〇〇円  
※会場窓口のみ販売

♪夏休み一日ART体験♪

第16回 Oneday Art ポート

中原篤徳 野原昌代  
(サポート) 吉岡徹 寺山三佳  
廣川政和

(オブザーバー) 山田朝彦

8月8日 書

井上清雅 師田久子 締引滔天

高木聖雨 (サポート)

尾花太虚 角田大壌

齊藤真澄

滑田耀齋 松浦龍坡

8月9日 洋画

田辺知治 大友義博 茅野吉孝

岩田壯平 亀山祐介 川田恭子

能島浜江 (サポート)

青鹿未奈 井上恵理

【ご協力いただきました】

株式会社吉祥、株式会社呉竹、株式会社ケーワス、株式会社東海丸二陶芸、株式会社墨運堂

8月2日 彫刻

中原篤徳 野原昌代

(サポート) 吉岡徹 寺山三佳

(オブザーバー) 山田朝彦

8月8日 書

中原篤徳 野原昌代

(サポート) 吉岡徹 寺山三佳

(オブザーバー) 山田朝彦

8月9日 洋画

井上清雅 師田久子 締引滔天

高木聖雨 (サポート)

尾花太虚 角田大壌

齊藤真澄

滑田耀齋 松浦龍坡

8月9日 洋画

田辺知治 大友義博 茅野吉孝

岩田壯平 亀山祐介 川田恭子

能島浜江 (サポート)

青鹿未奈 井上恵理

【ご協力いただきました】

株式会社吉祥、株式会社呉竹、株式会社ケーワス、株式会社東海丸二陶芸、株式会社墨運堂



少年が少しづつ世間を知っていく過程には、「父の部屋」があるのではないか。

そこにはいかめしい全集やむずかしそうな哲学の本が並んでいる。留守を見はからつてもぐり込んでは、子どもはいつしか大人の世間のまぶしさに、目覚めていくのだと思う。

わたしにも思い出がある。何度か、戸のあいだ部屋の中に父がゆつたりと籐椅子に坐りながら、大きな冊子を膝の上に広げているのが見えた。入つてみると冊子は新聞を広げた程にも大きい写真集で、表紙には「文展」とあった。

今日の日展の前身、文部省美術展覧会の作品集を毎年買い求めては、休日の日を楽しむのが父の日課だったのである。

そのせいか、わたしも大学生以来、よく上野の都の美術館に通つた。もう文展は日展と名をかえていたが、「上野にいく」といえば、日展を見に行くことを意味した。

父がしていたように。図録も買った。そう思い出して今回書庫で探すと、まず第三十八回日展の作品集が見つかつた。

三十八回の日展といえば、これが最後の上野における展覧会だから、記念すべき展覧会であった。

冊子は、この折に出合つた作品を思い出させてくれた。冒頭の日本画には高山辰雄さんらが並んでいる。偶然お会いした折、高山さんは

「想が枯れると飛鳥にいきます」と告げてくれたこともある。彫刻の部では川崎普照さんの「寛ぎ」と出合つたことになる。重量感がありながら鋭い、みごとな作だ。彼とわたしは、高校が同窓である。

そして漆の三谷吾一さんの作品は「静日」(挿図)。氏は日本の深層を、こよなく愛した。ここでも今よりもっと自由で豊かな日本の森林や深海、さらにはもつと生きいきとしていた人間を、まるで縄文時代のように見せてくれた。

氏のこの日本贊歌に感動して、生前、わたしが理事長をつとめる法人の「日本学賞」を贈らせて頂いた。

その折、氏を推薦してくれたのが三田村有純さんで、氏は三十八回の日展に「天を抱く処」という作品を出品している。

このようにわたしは日展を毎年楽しんできたが、日展はなぜ、多くの日本人を楽しませてくれるのだろう。

日展が百年をこえる伝統をもつ、その権威のゆえか。現在は法人の日展主催だが、それ以前は永く官営だったことによるのか。

いや、芸術の偉大さは権威や格式などを不要とするところにある。それにおもねればもう芸術ではない。

だからわたしは、日展作品の魅力は安定性に

あるのではないかと思う。

反伝統や挑発を拒否すれば、日展は陳腐に陥るだろうが、それが単なる試みである時には、価値とは認めない。それらが伝統や正当性に輝きを附加する域に達して始めて、すぐれた芸術になるという、この安定性をこそ、日展は価値とするのではないか。

日展にいく時は、身構える必要がない。生活の一部であるよう、「上野にいく」という感覚は、このような安定性から生まれるのだろう。日本人にとって日展は、贅沢な「秋の食事」なのかもしれない。もつとも、わたしにはもう一つ理由がある。

籐椅子の父にも会える。

中西進(なかにしすすむ)



一九二九年東京都生まれ。筑波大学教授、国際日本文化研究センター教授などを経て、大阪女子大学文学博士。

一九二九年東京都生まれ。東京大学大学院修了。

現在、高志の国文学館館長。

中西進著作集(全三十六巻)ほか、著書多数。



三谷吾一《静日》(第38回日展出品作)

## 日展の第五科に感じること

名兒耶明

## 日展の第五科に感じること

二つ目の印象は、分野で異なるが、漢字は明治以来、より中国的な作品を求めているよう で、篆書や隸書、行草体が中心で、それが日展 作品に反映していると思われる。ただし、それ らは私の目から見ると、形式は中国的でも、線 質や造形、そこに込められた作家の表現は、結 局日本人の感性が働いているように見え、本質 は日本的といえると思う。

また、仮名についてみると、平安時代中心の 仮名表現を目指し、それを越えようとするもの が多いと思う。本来の仮名に較べ、大きな作品 が多く苦労しているようだが、線質は古典とは 異なり現代の線である(巻物はかなり古典的)。 さらに新鮮さを考え、現代的な作品として、鎌 倉時代以降の仮名、それらに取り組むことで、な にか新しい大字の仮名を見つけることができる

そうした経験から、自分が学んできた日本の書道史上の作品と日展の歴史の中の書の七十年間の作品をみて、その印象を述べてみようと思う。まず、七十年間での大まかな作品の傾向が見えてくる。その一つは、書の大きな団体ごとの流行と言つて良いのかわからないが、まわりから評判になる作品が出現すると、それに似た作品がその団体の中で多くなっていると感じられる。つまり、大きなグループに属する作家たちは、良い作品が生まれるとその仲間の影響をうけてさらにそれ以上のものを作ろうとするのである。それがいくつもあることで、展覧会では活気づいているよう思う。漢字も仮名もいわゆる漢字仮名まじりの作品等すべてに感じられる。こうした傾向が出てくるのは日展の他の分野では少ないのかも知れないが、技術向上に關してはきわめて有効なことで、より良い作品作りにつながると思う。

のではないかと思うのである。  
そして、現在の展示される作品の全体的印象は、学生時代や美術館勤めの初めの頃に見て感じていた作品に較べると、技術的には洗練されているようには見えるが、書きすぎでどこか疲れが出ているように感じるものが多い。一所懸命に作品に取り組む姿勢は感じられるが、新鮮さを感じさせないのである。こうしたことが、他の分野でもあるのか不明であるが。

これは、書の作品作りの特色で、他の分野では、一つの作品を何十、何百と作ることはないが、書ではそれが可能で、紙一枚に一回きりで作るといった創作の仕方にも原因があるかもしない。

今後、日展を見るにあたって書の分野の歴史を踏まえながら、さらに疲れの見えない新鮮さを感じさせる作品を見ることができるこことを楽しみにしている。



名児耶 明（なごや あきら）

一九四九年北海道生まれ。東京教育大学（現 筑波大学）教育学部芸術学科書専攻卒業。

大東急記念文庫を経て、五島美術館学芸員。同館学芸部長、常務理事、副館長（二〇一九年まで）を務める。

現在、東京学芸大学非常勤講師、東京藝術大学非常勤講師。せたがや文化財団理事、筆の里振興事業団理事。書文化、古筆研究者。

各科審査員より

小さな広がり

加藤 晋（第一科 会員・審査員）



幼かつた頃、家の周りの小さな範囲がテリトリーでした。庭の無花果には、キイキイ鳴くゴマダラカミキリが住んでいましたし、山椒の木では、沢山のアゲハチヨウを育てました。

小学校の側に祀られていた古墳の裏には、小さくて、暗くひんやりとした穴があり開けていて、怖さと好奇心の間を揺れながら、覗いたり、手を入れてみたりしました。土手に咲く曼珠沙華に心奪われ、摘んで帰つた時は「子供だけで川に行つてはいけない」と言つていた母は困った顔をして「この花の根には毒が有る」と教えてくれました。今では、世界も行動範囲も広がり、豊かで便利になりましたが、胸躍る時は少なくなってしまいました。

それでも、絵の中に発見や冒険が潜んでいて、ドキドキしながら制作をしています。この度の審査では、ワクワクする絵に出会える事を願い、楽しみにしています。

安田敦夫（第一科 準会員・審査員）

この度、審査員に委嘱頂きまして思うことは、出品された方が、長い時間構想を練り、日々磨き続けて来た技術で現在の自身の全てを注ぎ込んだ一枚の作品に、審査の場で向かい合う重責を、強く感じます。日展の会場に自身の作品が展示して頂けた時の喜びや、ペラペラの落選通知を受け取った時を思い起こすと、尚更のことです。

帖佐美行先生や池田満寿夫先生の講演会に伺つたことがある母からは、先生方が審査の難しさや苦しみを話されていたことを、繰り返し聞かせられました。母なりの慰めだったのだろうと思います。

出品者の皆様のお作品を審査すると言うよりは、私自身の絵画についての見識を審査される機会なのだと感じます。果たして、短い時間で皆様の制作意図や美意識、そして、視覚芸術作品としての魅力を、自身の趣味趣向を控え、感じ取ることが出来るのでしよう

小学校の側に祀られていた古墳の裏には、小さくて、暗くひんやりとした穴があり開けていて、怖さと好奇心の間を揺れながら、覗いたり、手を入れてみたりしました。土手に咲く曼珠沙華に心奪われ、摘んで帰つた時は「子供だけで川に行つてはいけない」と言つていた母は困った顔をして「この花の根には毒が有る」と教えてくれました。今では、世界も行動範囲も広がり、豊かで便利になりましたが、胸躍る時は少なくなってしまいました。

それでも、絵の中に発見や冒険が潜んでいて、ドキドキしながら制作をしています。この度の審査では、ワクワクする絵に出会える事を願い、楽しみにしています。

米田 実（第一科 準会員・審査員）

このたび日展の審査員という大役を仰せつかり、たいへん身が引き締まる思いでおります。

二十代で初入選し、三十代で特選をいただき、

その間、毎年のように出展して、いた日展は、私にとって常に見上げるべき存在であり、大いなる挑戦でした。改めて諸先生方のご指導に深謝申し上げる次第です。

日展の審査の一端を担うということは、私にとって身に余る光榮であるとともに、恐ろしさを伴う重責に他なりませんが、みなさまの力のこもつた作品に、心眼も交えて真摯に向き合い、寄り添つてまいりたいと考えております。

新型コロナによって世界は未曾有の困難に直面し、人々の暮らしや考え方にも不可逆の変化がもたらされました。「コロナ後」の世界について、いまこそ私たち芸術家はその創造力を試されているよう思います。これまでも「危機」の時代に芸術は幾度となく生まれ変わり発展してきました。日展にとつても、このコロナ禍がその使命をいつそう力強く果たす好機となることを確信しつつ、私も微力を尽くして精進してまいる所存です。



## 家族の絆

池田清明（第一科 会員・審査員）

## コロナ禍での日展

丸山 勉（第二科 会員・審査員）

## 改組新 第七回日展審査にあたつて

西田陽一（第二科 準会員・審査員）

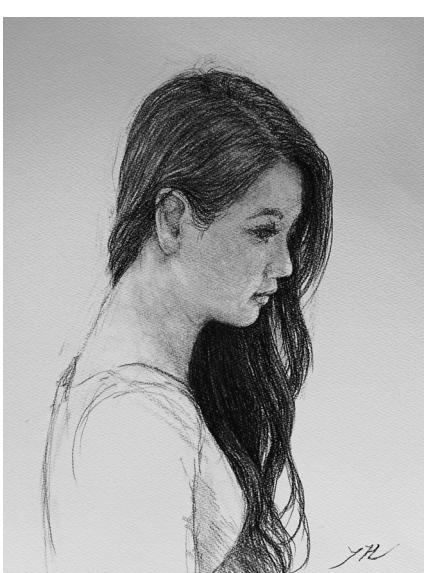


コロナウイルスが再燃し、その対応に社会が苦慮しています。美術界でも秋の公募展開催について意見が分かれるなか、日展は開催の決断をしました。このような年に審査員に選ばれたからには、出来る限りの努力をして、皆様を癒し勇気付けるような日展にしなくてはなりません。

私は人物画を描いて出品していますが、現場写生を旨とする私の絵ではモデルの役割が重要なとなります。出品作品一作一作に、モデルと二人三脚で描いた様々な思い出があります。そのモデルは主に長女が担当してきました。現在彼女は夫の転勤でロサンゼルスに住まいしていますが、「母子像」のモデルのために一時帰国してくれました。コロナの自粛生活で家族の絆が改めて見直されましたが、我が家ではそれを改めて見直されました。我が家では、それを支えてきました。

私が家では、それを支えて改組新 第七回日展は、こういう状況下で「美術・絵画が社会とどのような関係性を持つのか?」が問われる大事な展覧会になると思いまして。私が書きましたが、皆様それぞれの思いが集結してこの苦境の時にも日展が無事開催され盛り裡に終了できる事を希つてやみません。

その為には、作者自身が自分と向き合い「何に美的価値を見出すのか?」それを作品を通じ表現し、世に問う姿勢が大事なのだろうと思います。そして、その切実な問い合わせを審査で真摯に見つめる事が、自分の審査員としての務めだと考えます。



この度、初めて日展審査員の任を承るに当たり、自分の初出品の頃の意識をお伝えしたいと思います。私は地元で個展などの回数もなし、それなりの作家扱いをされていましたので、今更に審査などされなくともやつていけると感じています。東京の仲間などから誘われるまま出品しました。殆ど初めてに近い状態で日展を観たとき、それまで地元で数回日展に入選経験の方から聞かされていました内容や自分の知っている公募展との規模の違いに愕然としてしまいました。入選はしたものの会場で自分の作品を探してもなかなか見つかりませんし、ようやく見つけたときには自分の作品が見劣りしていることにガッカリしていました。そこから真剣に日展に向き合いました。そこから真剣に日展に向き合った葛藤の日々の連続ではありますが、今は日展に出会えたことに感謝しています。

色々な想いのある作品審査はとても重圧に感じますが、少しでも出品者の糧となれるように一生懸命努めたいと思います。

コロナウイルスが再燃し、その対応に社会が苦慮しています。美術界でも秋の公募展開催について意見が分かれるなか、日展は開催の決断をしました。このような年に審査員に選ばれたからには、出来る限りの努力をして、皆様を癒し勇気付けるような日展にしなくてはなりません。

私は人物画を描いて出品していますが、現場写生を旨とする私の絵ではモデルの役割が重要なとなります。出品作品一作一作に、モデルと二人三脚で描いた様々な思い出があります。そのモデルは主に長女が担当してきました。現在彼女は夫の転勤でロサンゼルスに住まいしていますが、「母子像」のモデルのために一時帰国してくれました。コロナの自粛生活で家族の絆が改めて見直されましたが、我が家では、それを支えて改めて見直されました。

私が家では、それを支えて改組新 第七回日展は、こういう状況下で「美術・絵画が社会とどのような関係性を持つのか?」が問われる大事な展覧会になると思いまして。私が書きましたが、皆様それぞれの思いが集結してこの苦境の時にも日展が無事開催され盛り裡に終了できる事を希つてやみません。

その為には、作者自身が自分と向き合い「何に美的価値を見出すのか?」それを作品を通じ表現し、世に問う姿勢が大事なのだろうと思います。そして、その切実な問い合わせを審査で真摯に見つめる事が、自分の審査員としての務めだと考えます。

## 感謝と希望

谷口淳一（第三科 会員・審査員）



審査員を拝命すると思い出ることがあります。若い時、鑑査通知が届くと、恐る恐る封を開けたものでした。落選の通知をみると、「あ長い一年がはじまる」と何度か思つたことがあります。しかしその度ごとに先輩方、友人等から励ましをもらい、今日まで続けることができました。感謝の気持ちで一杯です。

具象彫刻の道は、平坦で常に光が射しているというわけではありませんが、希望をもつて歩んでいきたいと思っています。自分の手で創造できる素晴らしいは、何事にも勝るものと信じております。

少しでもいい仕事がしたいと思い悩んだ時、近くの六波羅蜜寺に足を運び、空也上人像を見ることができます。念仏を唱えている一瞬の像で、空也の誠実な人間性が表れています。作者の心が感じられる作品であり、造形力と共に、いかに心で創ることが大切かを教えてくれます。今回の審査では、それぞれの作家の持ち味を生かした、心のこもった作品と出会えることを楽しみしております。

「心ふるえる作品がつくれているか」、恩師橋本堅太郎先生のお言葉です。

見る人の今に切り込み、心ふるわせる作品になつてゐるか、魂があるか。自問しながら制作しているつもりが、ふと気づくと飾り物になつてしまふのが常です。

私は、信州で北アルプスの山々を見て育ちました。高校・大学時代に度々訪ねた安曇野市の碓山美術館。荻原守衛（碓山）の「女」の像があの時の私の心に切り込んで、彫刻の道を選ばせてくれたように思います。

また、奥多摩の小さな美術館で見た大塚勉氏の油絵。谷川岳で絵の取材中に遭難し三十八歳で逝つた作者の魂が、今も絵の中の稜線を風にのつて登つてゐるかのようで、涙が溢れるほど私の心を激しくふるわせました。作品のもつ力、作品がある意義を確信しました。見る人の心をふるわせる作品であるかを意識して、審査させていただきます。

## 心ふるえて

上田ふみ（第三科 準会員・審査員）



日展に出品し始めたのは大学四年の時、夜通し高速を走り上野へ向かい、とにかく無事に搬入出来た安堵感と同時に、なんとも言いようのない気持ちで帰つた事を思い出します。

毎回搬入日から通知が届くまでの時間は、祈るような思いで結果を待つていました。

初入選の嬉しさ、落選の痛さ、特選の喜び。 純余曲折、二十数年が経ち今年は、思いもかけず日展審査員を拝命し、身の引き締まる思いです。

その責務の重要性を痛感致しております。

これまで支えて下さいました方々に改めて感謝しつつ、精一杯務めてまいります。

審査にあたつて、出品されるひとつひとつひとつの作品に対し真摯な姿勢をもつて向き合い、作品が発する何かをしつかりと受け止めていけるよう心を澄まして鑑査に臨みたいと思ひます。

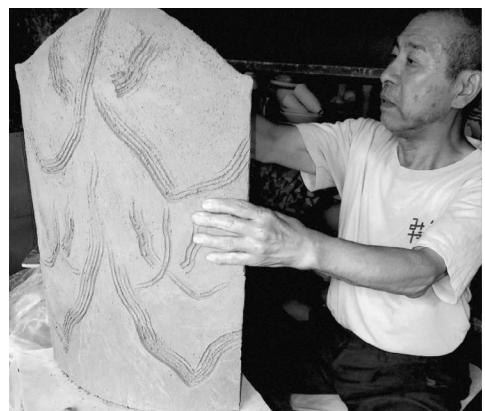


## 日展審査に寄せて

森 矢真人（第三科 準会員・審査員）

## change

司辻光男（第四科 会員・審査員）



日展に出品する切っ掛けは皆さんそれがあると思うが、私の場合は中学三年の夏休みに知人宅で日展作品集を目にした事だった。収められていた作品群の迫力、線の美しさ、素材の持ち味を生かしたデザイン性に圧倒され、見る度私もいつか日展に出品出来るものを作りたいと思つたものだった。

初出品は二十七歳、初入選は三十歳の時で、知らせを受けた時感激で体が震えたのは今でも忘れない思い出だ。

しかしその後何回か落選し苦い時代もあった。初入選からそろそろ半世紀が過ぎ、審査員も経験し、数々の作品に触れて來たが、今思うと転機になつたのは落選した時だった。

審査員から作品を見直すチャンスを与えて貰つた、これはメッセージなのだと思うことで前向きに捉え、作風を変える転機とする事が出来た。

今年は春から新型コロナ一色で、これを機会にまた社会も構造から変わっていくのだろう。でもこういう時だからこそchange!作りつづける情熱は変えず柔軟な姿勢で取り組んで欲しい。

## 創作に寄せて

村田好謙（第四科 会員・審査員）



過去に体感した感動を超える創作こそ作家の目標かと思います。産みの苦しみと創作の喜びを感じながらの達成感を求める為にも精神世界を鍛える事が必要かと思い、何度も早朝坐禅会に参加したり、琵琶湖へ行つて波打ち際にただ朝まで座つてみたり、広い空の下で野宿をしてみたり、日常から離れ自然の中に身を置く事で時空を越え、ちっぽけな存在の自分を感じてみたりしています。他人から見ると変わった人に写るかもしれません、環境を変え、五感を動かす事で創作意欲が湧いてくるのです。結局作品制作とは作品を通して自分自身を引き出す作業の様なものかも知れません。

今回、改組新第七回日展での審査をする側となりましたが、展覧会がスタートすれば今度は審査員が審査をされる側になる事を肝に銘じて、かつてワクワクドキドキしながら結果を待つていた若い頃の思いを忘れずに責務を全うしたいと思います。

今年は春から新型コロナウイルスの感染拡散防止のために、様々な展示会やイベントが中止となりました。

また、人々の生活様式も変わり、自粛を求められると同時に、リモートによる会議や打ち合わせも多くなりました。従来のような対面でのコミュニケーションがとれず、自宅で過ごす時間が長くなればなるほど、人々の心身の統制に芸術文化は大きな役割を担うようになります。

そのような状況下で、改組新第七回日展の審査員の任命を受けて、その責任の重大さを感じてしまふと共に気の引き締まる思いです。工芸とは多様な素材を手、目、耳などの身体感覚を研ぎ澄まして創作する分野である故に、作り手が今を生きていることを実感しつつ、自己と他者との往還で作品が成立していくと考えています。一人の制作者として、個々の作品の力が集結して、人々に大きな感動を与えるような展覧会になることを期待すると共に、そのような展示になるように若輩ながら尽力していきた

## 今を乗り越えるために

古瀬政弘（第四科 準会員・審査員）



## 苦境の時こそ正に真価が問われる

有岡郷屋（第五科 会員・審査員）

今年は大変な年となつた。本来ならば今頃日本は五十六年ぶりとなるオリンピックに湧きかえり、スポーツはもとより我が国の文化芸術を世界に発信すべく様々なイベントが開催され盛況を博しているところなのだが、突然やつてきた新型コロナウイルスの世界的感染拡大によつてオリンピックは延期となつてしまい、予定された文化芸術関係の催事も軒並延期中止に追いやられてしまつた。発表の場の大半を失つてしまつた多くの作家の人達も何ともやるせない思いで日々過ごされていることだろう。

しかし反面この巣ごもり状態を好機と捉え、作家としての自己研鑽のため、平常より増加した時間を如何に有意義に活用するか、したかが作品に反映していくのではと考える。

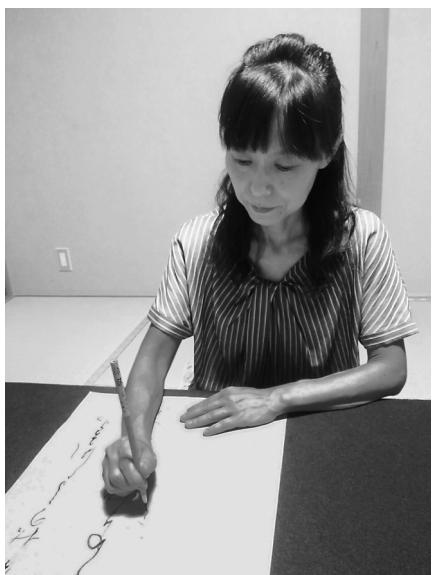
以上のことからも今回展は正に作家の真価が問われることであると言える。

多くの意欲的作品の出品を期します。



## 改組新 第七回日展の審査にあたつて

木村通子（第五科 会員・審査員）



この度、二度目の審査員を拝命し、その重責に身の引き締まる思いであります。

初審査の時を振り返りますと、気迫のこもつた九千点余りの書作品を前に、審査の先生方の、「良い作品を絶対に見逃すまい」とする厳しい姿勢を目の当たりにし、必死で務めさせていたいたこと、数々の書風はあれど、完成度の高い作品は、必ず観る者に迫りくるものがあり、訴えかける力を持つという事を肌で感じ、感動したことを思い出します。

コロナ禍で数々の書展が中止を余儀なくされる中、本年度の日展が開催されることは、大変意義深いものがあり、必ずや、「作品を完成させる」という作家の大きな目標となり、励みとなり、力となることでしょう。

強い意思のもとで制作された一つ一つの作品は、かけがえの無いものです。初心を忘れることがなく、公平公正に、心して審査に臨む所存でございます。

## 審査という重責

尾西正成（第五科 準会員・審査員）



この度、審査員という大役を拝命し、驚きと共にその重責を痛感しております。書を志して以来、日展を書作の鍛錬の場として、その時の自身の精一杯が投影したものをお品することを心掛けていました。同様にお考案の作家の方も多いかと存じます。

審査とは、出品者のすべてが詰まつた渾身の一作を前に、その魅力を衒ひない無垢な心で感じ取り、理解して享受、時には対峙し共鳴しながら吟味を深める。それと同時に、その作品の書的な質の高さが担保されているか否かを冷静かつ客観的な眼で見極めて、総合的に判断するものではないか、と考えます。

今日、作品の表現方法や自由な発想は益々多岐に広がります。その多様な書表現を審査員の皆で漏らすことなく真摯に精査することが必須であり、重責と言われる所以です。この度は心強い審査の先輩方と共に、書の今が投影されたような答えが出せるよう微力ながら審査に勤めたいと意気込んでいます。



# 作家人生——私の仕事——



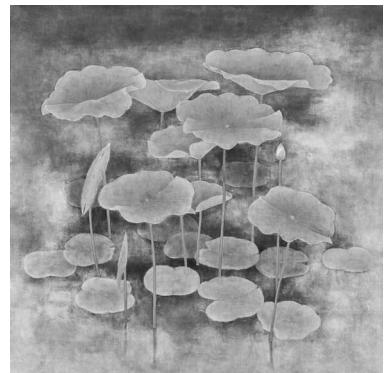
《枝垂桜》(平成二十四年第四十四回日展出品作)



内閣総理大臣賞  
《夏草》(平成二十七年改組新第一回日展出品作)



1980年北京 人民大会堂前にて



《蓮池》  
(平成二十六年改組新第一回日展出品作)

神 龍

第一科日本画 理事 渡辺 信 喜

京都市立美術大学（現・京都市立芸術大学）では四年生から公募展に出品できたので、風景画で挑戦したのでですがダメでした。卒業制作は一転好きな花鳥画でと思い、力強い動きのある軍鶏を表現するのにペインティングナイフだけで制作しました。卒業後も同じ技法で「七面鳥」を作り、初入選となりました。しかし翌年出品の「縞馬」はダメでした。やはり独りよがりで迷うことがあり、画塾に入会し指導を受け、研鑽の場が必要だと思いました。師事をするなら花鳥画の山口華楊先生という思いでした。幸いなことに高校時代の恩師で晨鳥社の天野大虹先生の計らいで晨鳥社に入会することができ、作家としてのスタートとなりました。

写生の大切さの指導を受け、日本画を意識するうちに、先人が若い頃に宋・元の時代の絵画から学ばれたように、私も博物館で観た宋時代の李迪筆「紅白芙蓉図」に感銘を受けました。色紙大ながら密度ある描写が画面に緊張感を醸し出し、学ぶべきところの多い好きな絵です。色々な作品を観たくて親友と台湾の故宮博物院を訪れ、感動の日々でした。その後、晨鳥社の研修旅行で山口華楊先生を始め塾員と故宮博物院を訪れました。いつかは宋元画が生まれた中国本土の旅にと憧れを抱いていましたが、一九八〇年に日中友好協会会計らしいのツアーで北京、西安、洛陽と旅行し、中国の歴史の深さを実感し、雄大な大地と風土に魅せられました。その後博物館、仏教遺跡、風景などの写生に十数回訪れていますが魅力は尽きません。

以前、ある先生に若い人達の絵はどうですかと尋ねると「ものを見ていらない」との一言でした。自分に言われているようでドキッとしました。それ以来写生の折には常に心掛けるようになりました。福田平八郎先生の言葉で「ものの神髄をつかむことに努力するのは、いつの時代でも大切な画家の道だと信じるのです。」とあります。これからも自然を良く観察して、写生を怠らず活動した対象と向かい合い制作していくたいと思います。



《一葉》(平成17年第37回日展出品作) 内閣総理大臣賞



《雲機》(平成二十二年第42回日展出品作)



《満街聖人》(平成三十年改組新 第五回日展出品作)

## 大転機—そして今

第五科書 会員 杭迫柏樹

忘れもしません。生意氣盛りだった二十七歳の春、書店で先輩の古谷蒼韻先生と……。  
「この頃どうしているか。みんなよう勉強しているから、君も日展に出品したらどうだ。」  
「日展なんか出しません。独学で行きます。」  
「お前みたいなのをチンピラと言うんだ。日展に出品している人達がどんなに勉強しているか見に来い！」  
「……。」

「せっかく来るなら、自分の書いた作品を持って、村上三島先生に紹介するから、ついて来い！」

私はその頃、「自分の眼を信じろ」と大学で教えられ、独学を旨として、前衛や美学にはしつたりしながら、「伝統」という大鉱脈の偉大さに気づかず、今思えば、随分自分勝手な習作を、古谷・山内観両先輩に導かれて、持つて伺いましたら、村上先生、「おお、君の風が出来ている。しつかりやれ。」と。

六月に入門を許され、九月に日展に出品したら、なんと入選！

村上先生は、常々「私は灯台だ。迷つたら灯台を見ろ。」と……。

以来、村上先生の巨視的なご指導と、古谷先生の「作品第一主義」の厳しい叱咤のお蔭で今日あると思うと、改めて感謝の念でいっぱいです。

さて、今の私はー。切実に思いますのは、文字の意味優先の戦前から、造型第一主義の戦後、私はそのまま只中で成長したのですが、かつて「東洋芸術の第一」と評された書とは?と熟考しますと、「文字の意味(知性)と美的表現(感性)が融け合った、全人間性投影の稀有な芸術」であることに驚かされます。そして、その実現こそが、自分の生きた時代の証言者であることになると信じます。静座して、日本刀で心を澄まし、気の充ちるのを待つて筆を執る。「切れれば鮮血、打てば快音」を目指して……。

## 委員会委員新人事

### 改組新 第7回日展図録 (五部門五分冊)

## 日展会館(本館)利用案内

### 編集後記

令和二年七月十六日開催理事会において、左記委員が選考された。

### 日展運営委員会

日本画 福田 千恵  
洋画 根岸 右司  
彫刻 神戸 峰男  
工芸美術 武腰 敏昭  
書 黒田 賢一

### 新刊行物のご案内

#### 改組新 第7回日展作品集

○定価 各二、一一〇〇円(税込)

○令和2年11月5日発行予定

○東京会場の全陳列作品図版・目録を収録

(作家名・作品題名の読み仮名付)

○全作品に作品寸法、工芸美術には技法を表記

○審査所感、授賞理由ほか諸資料

○A4判変型

○定価三、〇〇〇円(税込)

○令和2年10月30日発行予定

○五部門の全会員・審査員・受賞者の作品図版

○別冊 作家本人による作品解説、釈文(書)

○諸資料

#### 第二科『日展の洋画』

オールカラー 約一四〇頁

表紙 佐藤 哲(出品作・予定)

#### 第三科『日展の彫刻』

オールカラー 約七〇頁

表紙 山崎隆夫(出品作・予定)

#### 第四科『日展の工芸美術』

オールカラー 約一二〇頁

表紙 今井政之(出品作・予定)

#### 第五科『日展の書』

オールカラー 約一五〇頁

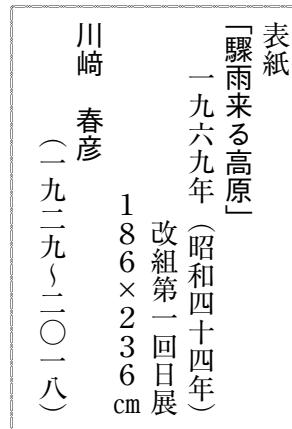
表紙 戸峰男・今井政之・新井光風(出品作・予定)

謹んで哀悼の意を表します。  
左の先生方が逝去されました。

山田 勝香先生(書・会員) 2・7・12  
江口 大象先生(書・会員) 2・9・3

※ご注文方法等、詳細はホームページにてお知らせします。

○会員・審査員・篆刻はカラー、  
準会員・無鑑査・特選・一般入  
選はモノクロ 約二〇〇頁  
表紙 新井光風(出品作・予定)



日展会館(本館)の貸しスペースはギヤラリー・会議室・教室として、ご利用いただけます。なお、新型コロナウイルス感染症対策として、利用人数制限を設けております。詳細はホームページをご覧ください。  
(利用に関する問い合わせ)  
公益社団法人日展 施設管理係  
電話 03(3821)9543

会期中は考えられる最大限の感染予防対策が必須になり、また移動も不自由な状況下にあるかもしれません。過去に経験のない会場風景が展開される可能性もあります。しかしながら日展には幾度となく多難な時期を経験した歴史があります。日展を思う人達の手によりきっと良い形で乗り越えられることと思います。

最後になりましたがコロナ禍の早期終息を願いつつご自愛のほどお祈り申し上げます。(西村)

編集委員 川田 恭子 水野 政  
桑原 富一 平野 行雄  
清家 悟 堤 直美  
相武 常雄 月岡 裕二  
中村 伸夫 西村 東軒